

毎日新聞

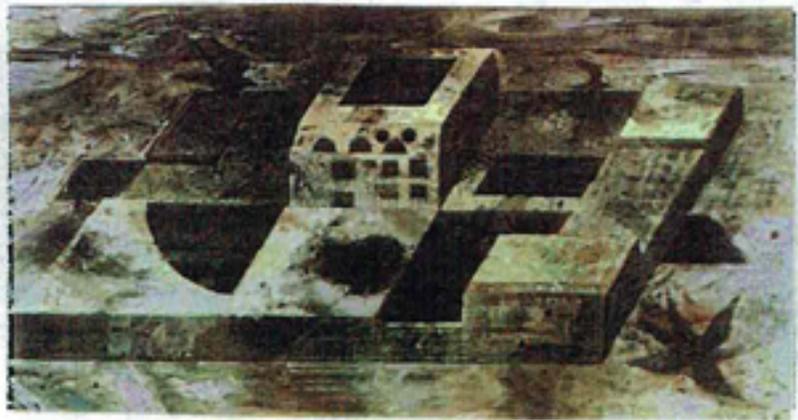
夕刊

発行所 北九州市小倉北区東町
13-1 (郵便番号 802)
毎日新聞 西部本社
電話 (093) 541-3131
郵便振替口座 福岡 5-11030
〒802-0134 下関 1-11354
© 毎日新聞社 1988

1988年(昭和63年) 3月10日 (木曜日)

美と自意識との格闘

美術 滝純一展



「風巢」(1987年)

の中に、遠慮がちにするまればはしはは面の中に隠れながら、有機物の持つ曲線で、魔

やがて、細い筆を植えた籠は、固く強いマチエールを作

りながら、足の長いやせた犬や老いた裸木を描いていく。

犬の多くは後ろ姿で、時々、振り返っては、見る人と向かい合う形になる。犬たちがは

うのは、矩形に区切られた地面の上で、ここにも機能的な

幾何学模様への画家の偏愛がうかがえる。そして、この地面を走る直線が、犬の足や尾

がつくる曲線とスパークして、緊張をよんでいる。

最近描き続けている田原城の長崎限・端島(重慶島)は、

籠の幾何学模様(無機物の機能美)への偏愛を凝らして余

りある題材だったろう。たとえば、「風巢」(一九八七)

に描かれているような、精明に自分を振り返ったものだった

を反射するコンクリートの建物。魔虚になった人工物の冷

たく無味な形態が、四角い窓やくぼみと相まって、死と隣

り合わせのような甘美ささえ放っている。

しかし、籠はこの魔虚の上

に開を轟き、耳黒な生き物たちを配している。犬や鳥たち

は、この魔虚の中に隠れながら、有機物の持つ曲線

籠は、無機物の持つ幾何学的な美しさの中に、生き物と間を配して、深みのある、緊張した画面を作り上げる画家である。画家は画面で、美と自意識の格闘を演じている。見る人に訴えかけてくる。籠にとって、直線が魔虚さ

線を持つ生物を置き放つことは従来の趣向のようだ。たとえば一九七三年の「予知」。大きく直線が区切ったシュールな画面に、人間の顔や昆虫が、圧せられるように細かく描かれている。耳の黒く、や昆虫の触角の屈れ、羽の震えなどが、メカニク的な直線

「風巢」は、北九州市立美術館、一九八四年、長崎県生まれ、福岡教育大学教授、三紀会委員、福岡県議会市任。二十一日まで、北九州市立美術館。

(徹)